〔連載〕中国を歩く、世界をみる　第3回

世界の「斜都」

丸川知雄

ホワイトハウスのスタッフとして活躍したこともある某有名教授のサンディエゴ郊外の自宅でパーティーがあってお邪魔した。二〇〇万ドルは下らないだろうと噂されたその自宅は海を見下ろす丘の斜面にあって、私が勝手に思い描いていたアメリカの豪邸のイメージそのままだった。前回書いた中国の避暑地「廬山」に行ったときも思ったのだが、欧米人は傾斜した場所に住むのが理想なのではないだろうか。ということで、今回は私の限られた見聞からではあるが、世界の「斜都」、つまり傾斜した都市について書いてみたい。

さて、もし世界の「斜都」ベスト五を挙げるとしたら、必ずその中に入るであろう世界屈指の斜都がブラジルのバイーア（サルヴァドール）である。ここは大西洋に向かって突き出た岬を覆うように市街地ができている。大西洋の荒波にさらされた岬は両側から激しく削られて急峻な崖ができている。その崖の下に埋め立てによって作られたと思われるわずかばかりの平地はシダージ・バイシャ（下の町）と呼ばれ、オフィスビルが建ち並び、港湾施設もある。その裏手に高さ八〇メートルの崖があり、その上に広がる町に行くには大型のエレベーターに乗る。趣があるのはもちろん崖のうえのほうで、ポルトガル植民地だった時代の首都だったこの町には由緒のある教会や、ポルトガル風に壁がパステルカラーに塗られた古い建物が並んでいる。ブラジル内陸でとれる金の積出港だったためか、教会の内部は驚くほどの量の金で飾られている。そしてこの町並みを通る通りはどれも激しく傾斜しているのだ。

特に、野外音楽堂へおりていく道が急だったことが印象に残っている。高層アパートに囲まれたすりばちのような所に野外音楽堂があり、そこで有名アーティストのコンサートが開催される。アパートからはコンサートが丸見えである。野外音楽堂で某アーティストのコンサートをみていたら、舞台上の歌手がやおら「後ろのアパートの人たち、元気かい！」と声をかけた。振り向くと、アパートのベランダから大勢の人たちが手を振っている。ビールを飲みながらタダ見を楽しんでいるようだった。野外音楽堂を迷惑施設だと言ったりする人がいない大らかな土地柄だからこそ、アパートと野外音楽堂が隣接することが可能なのだろう。

アジアの有名な斜都といえば香港である。香港島は標高四二八メートルのビクトリア・ピークを頂点とするゴツゴツとした島で、アヘン戦争に勝利したイギリスが植民地化するまでここには小さな漁村しかなかった。そこにイギリスは港湾を整備して中継貿易の拠点とし、中華人民共和国が成立してからは政治的理由から大陸を逃れてきた人たちも流入し、さらに中国も対外貿易の窓口や資金運用の場として利用した。こうしてゴツゴツした島の海沿いの幅わずか一キロメートルほどの場所に奇跡のように高層ビルが林立し、アジア有数の金融センターになった。その超現代的都市の街路はどれも傾斜しているのである。海から陸地が急角度で突き出ていれば、海のなかでも大地が急角度で下がっているはずだから、天然の良港ということになる。天然の良港イコール斜都という等式はほぼ例外なく成立するのではないだろうか。

イギリスが香港島の次に獲得した九龍半島のほうは、香港島に比べればまだ平らなところが多く、こちらも高層ビルが林立しているが、香港人の意識のうえでは九龍半島側はやや格が落ちる感じがあるようだ。成功した香港人は香港島に住みたがり、お金を貯めたら山のうえの方へ移り住んでいくのだという。もちろん交通はどんどん不便になり、道の傾斜もどんどん急になるわけだが、金持ちにはそんなことよりも窓外に眺める夜景のほうがずっと重要なのだ。東京のマンションのチラシでは「駅徒歩〇分」であることが第一に強調されるが、それは要するに仕事に行くための便利さを競い合っているのであって、まあ勤勉というのか、ご苦労さんなことである。

さて、中国の本土へ目を転じてみると、主な都市はだいたい平らである。首都の北京は「平都」とでも呼びたくなるぐらいほぼ真っ平らな都市で、市街地の「最高峰」は故宮の北方にある高さ四三メートルの人工の山、景山で

ある。平都のよいところは自転車での移動が楽なことで、約二〇年前に私が北京に住んでいた頃は、広々とした自転車専用道をゆるゆると何時間もペダルを漕いで行けば北京のどこへでも行けた。車の通行量が格段に増えた今ではかつての自転車専用道が車道として使われるようになったのでのんびり自転車に乗っていられなくなった。何時間も自転車に乗っていたら、車にはねられるか、呼吸器関係の病気になってしまいそうだ。長江の最下流域にある上海は北京に輪をかけた平都で、郊外の農村部も含めた市全域の「最高峰」は標高九八メートルしかないのだそうだ。

平都が多い中国の大都市のなかで例外は重慶である。ここは別名「山城」と呼ばれるぐらい中国では有名な斜都である。長江と嘉陵江という二本の大河が合流するところに、細長い半島のように突き出ているのが重慶市である。流量が多く、流れも速い二本の大河によって大地が深く削られているので、市街地のある「半島」は高く盛り上がっている。中国といえば大勢の人々が自転車に乗っているイメージがあった一九八〇年代にも重慶では自転車は使われていなかった。庶民の足はもっぱらバスだったが、一九九二年に私が重慶を訪れたときに強く印象に残ったのは、人々がバスを待つときにバス停に固まって待つのではなく、道路に沿って横長の列になって待っていたことである。当時の中国では、列の順番通り整然とバスに乗り込むようなことはなく、バスが来たら人々は先を争って乗っていた。ところが、当時の重慶のバスはブレーキの効きが悪かったのと、

カント実践哲学とイギリス道徳哲学
カント・ヒューム・スミス
高田　純著　予価3360円
カント従来の狭い図式的理解を修正する比較思想研究。

若い教師のための小学校社会科
Chapter15　須本良夫編著
社会科教育の初学者、小学校の教員を対象に授業を楽しくする理論・実践例を紹介。
予価2205円

看取りの文化とケアの社会学
大出春江編著　定価3465円
現代社会における死と、死にゆくことを看取る現場を考察する。

言葉と文体
修辞法の試み
佐藤信衛著　定価1890円
学問、翻訳、あるいは一般的な言語表現についてあるべき姿を体系的に論じた、言語論、文章論。

解釈型歴史学習のすすめ
対話を重視した社会科歴史
土屋武志著　定価2100円
歴史を解釈する民主的で、対話型の歴史学習とは何かを考える。

平和構築の思想
グローバル化の途上で考える
マティアス・ルッツ＝バッハマン編著
舟場保之・御子柴善之監訳
9.11テロ直後におこなわれた学横断的討議。永遠平和、国際公法、安全保障理事会、寛容……
定価2730円

科学技術の倫理学
勢力尚雅編著　定価2100円
「責任」という概念から技術者倫理を考えるうえで必要不可欠なビジョンを描く。

梓出版社
〒270-0034 千葉県松戸市新松戸7-65
TEL/FAX 047-344-8118
http://www.azusa-syuppan.co.jp

リヨンのヴィユ・リヨンの一角

重慶の坂道が急なので、バスがどこで止まるのか予想がつかず、待っている人たちはそれぞれこの辺にバスの乗降口が来るだろうとヤマを張っていたのだ。重慶の「半島」の部分と、二本の大河の対岸とを結ぶ手段としては大きな橋と渡し船に加え、ロープウェーもある。観光用ではなく町の普通の移動用にロープウェーが使われているというのも斜都ならではの風情である。

リヨンのフルヴィエールの丘から降りる階段

重慶が斜都であることから特殊な職業が生まれた。それは現地で「棒棒（ばんばん）」と呼ばれる担ぎ屋さんである。棒棒たちは竹の棒にお客さんの荷物や家電製品、家具などをひもで結びつけて何でも運ぶ。みな農村から出稼ぎに来た人たちで、一回あたり一〇元（＝一四〇円）程度の担ぎ代をもらって坂の下から高層アパートの上まで荷物を運んでいく。棒棒は重慶市内に三〇万人いるとも言われるが正確な数は誰もよくわからない。担ぎ屋という商売自体は泰山など中国の有名な山にも見られるが、それが棒棒と呼ばれて市民生活に浸透しているのは重慶だけのようである。

重慶の傾いた道を歩いていると硬い岩の斜面がくりぬかれて鉄の扉がついているのをいくつも見かけた。どうやら防空壕の跡らしい。日中戦争で首都南京を追われた国民政府は重慶に臨時の首都を移した。天然の要塞である重慶を日本軍は陸から攻められなかったので、四年以上にわたって空襲を繰り返し、一万人以上が死んだ。「斜都」重慶の斜面には日本と中国の不幸な過去の跡が刻まれている。

ヨーロッパにも多くの斜都があるのだろうけれど私が何度か訪れたことがあるのはフランスのリヨンである。リヨンもローヌ川とソーヌ川という二本の川が合流する半島のような場所にできた都市で、特にソーヌ川の左岸のヴィユ・リヨン（古いリヨン）と呼ばれる地域は河岸段丘になっていて傾いている。小高い丘の上に町全体を見下ろすように教会が建っている。一八二三年にヨーロッパで大流行したコレラからリヨンの町を救った聖母マリアに捧げて立てられたフルヴィエール教会である。丘の上へはフニクレール（ケーブルカー）が通じている。都会の中心からいきなりケーブルカーが出発するというのも斜都ならではの風情である。

船上から見たオークランド港

昨年一二月に初めて訪れたニュージーランドのオークランドもなかなかの斜都ぶりだった。オークランドのホテルにチェックインし、部屋番号が六〇〇番台だったので、渡り廊下を通ってエレベーターに乗り、他の宿泊客と一緒に上へ向かった。ところが、いつまで乗っても目的の六階にたどり着かず、エレベーターはついに最上階の一八階まで行ってしまった。そこで改めて六と書かれたボタンを押して六階に行くとそこはロビーのある階であった。表玄関から入ってロビーでチェックインした階が実は六階で、その下に五層のフロアがあり、一階から反対側の裏口に出られる。ホテルの立っている土地が傾斜しているので、表口から見た一階は裏口から見れば六階なのだ。湾に面した天然の良港として一九世紀から開発が始まったオークランドもやはり必然的に斜都なのである。ホテルはオークランド大学の近くにあったが、この辺り一帯が丘の上にあるらしく、そこへ上がっていく道はゆうに二〇度以上の傾斜があるように見えた。こんなところでの運転は神経を使うだろう。

海外の斜都のことを書いているうちに紙幅が尽きてしまった。日本にももちろん斜都はいくつもある。次回は日本の斜都のことを書こう。

（まるかわ・ともお＝東京大学社会科学研究所教授）